

## 真鶴町岩沖におけるイワガキ養殖 —多様な関係者との協働により地域活性化—

株式会社岩ガキ BASE  
皆木 孝行

### 1. 地域の概要

私たちが住んでいる真鶴町は神奈川県西部に位置し、箱根外輪山麓と相模湾に突き出した小半島から構成される、長さ約7km、幅約1kmの、県内で2番目に小さい町である。名産品である小松石の採掘場や温暖な気候を生かした果樹園が営まれる他、漁港のある真鶴地区、岩地区では古くから漁業が行われている。また、小田原市と湯河原町に隣接し、箱根や熱海などの有名観光地に極めて近いことも特徴である。



図1 真鶴町の位置



図2 岩漁港の位置

### 2. 漁業の概要

令和4年2月現在、岩漁業協同組合には正組合員23人、准組合員11人が所属しており、「魚つき保安林」に指定される「御林（おはやし）」から流れるミネラル分を多く含む水が流れ込む海域で、定置網、刺し網、裸潜り漁などが営まれている。令和3年度の漁獲量は486トンで、うち定置網が約90%を占めている。定置網によるサバ類、ブリ類をはじめ、刺し網によるヒラメ、イセエビ、裸潜りによるアワビ、サザエ、ワカメ、ナマコなど、実に多くの魚介類が水揚げされている。

### 3. 研究グループの組織と運営

平成30年12月に地域の若手漁業者、行政、業界団体などが連携した「真鶴町岩沖岩牡蠣養殖推進事業協議会（以下、協議会）」を立ち上げ、本格的に活動を始めた。現在

では、定置漁業を営む漁業者 11 人がイワガキ養殖を行っており、令和 3 年 3 月に設立した地域商社「株式会社岩ガキ BASE」が出荷・販路拡大を担っている。民間企業から支援を受けながら、岩ガキを通じて町に人を呼び込むためさまざまな P R 活動に協働で取り組んでいる。

現在、協議会メンバーは 5 人、株式会社岩ガキ BASE 従業員は 8 人である。



図 3 岩ガキ BASE メンバーと協議会関係者

#### 4. 研究・実践活動の取り組み課題選定の動機

岩漁港は規模が小さく、定置網などによる漁獲型水産業を中心としてきた。そのため流通や観光などを利活用して地域に集客するような取り組みは十分とは言えない状況にあった。

また、この海域では 10 年ほど前から、カジメをはじめとする海藻が消失する磯焼けが進行しており、素潜り漁ではアワビの漁獲が激減する



図 4 岩漁港

など大きな被害を受けている。藻場を再生させるため、カジメスポアバックの投入などの活動は行ってきたものの、短期間での回復は見込めず、素潜り漁の水揚げ高を補填する新たな収入源の確保が必要と考えた。

このようなことから、岩地区では町のさらなる発展につながるよう、「真鶴岩牡蠣養殖プロジェクト（以下、プロジェクト）」を立ち上げた。プロジェクトでは、旧来の漁獲型水産業から、地域商社機能を持った新たな水産業に発展させる。地域関係者や住民などが連携してプロジェクトの推進を図ることで、若手漁業者の離職や地域外への流出を防ぐこととともに、観光などにも焦点を当てて町内外の交流を促す地域ビジネスモデルを構築し、地域活性化を目指している。

#### 5. 研究・実践活動の状況および成果

##### (1) イワガキ養殖試験

真鶴町の地域活性化と漁業の振興を目指し、新たな名産品を創出するため、平成 27 年冬にイワガキ養殖試験を岩漁業協同組合で開始した。試験開始に当たっては、平成 12

年からイワガキ養殖に取り組んでいる島根県隠岐郡海士町で先進地視察を行い、そこで技術指導を受けた。試験開始後は、海士町とは自然環境が異なることから、フジツボやヒラムシなどの付着生物が多く発生し苦労したが、生育は順調であったことから、平成 30 年 12 月に地域の若手漁業者、行政、業界団体などが連携した協議会を立ち上げ、プロジェクトを本格化した。

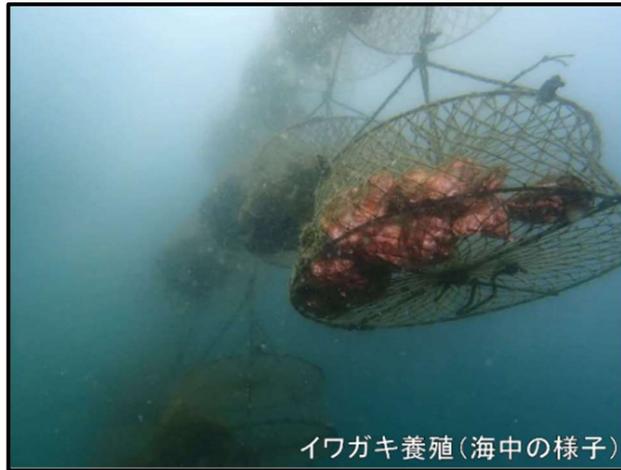


図 5 海中から見たイワガキ養殖

試験初年度の稚貝の垂下数は 6,000

個であったが、平成 30 年度以降は毎年 10 万個程度の稚貝を垂下するようになり、作業も増加した。養殖を行う漁業者は全員が定置網漁業の従事者である。当初は普段の仕事に新たな作業が加わることになり、肉体的にも厳しい時期が続いたが、継続するうちに技術も身に付き、なんとかこなせるようになった。

また、垂下数が増加するに従い、海底に落ちたカキ殻が刺し網を傷つけてしまうという問題が生じ、養殖の事業化に反対する声も聞かれるようになった。私たち定置網漁業者は水中での網のメンテナンスも行う潜水士でもあるため、自ら潜水し海底の状況を確認しに行き、海底清掃などを行う計画も立てた。小さな浜であるため、これらの行動で理解が得られ、徐々に賛同してもらえるようになった。

## (2) 多様な関係者との協働で早期に実現した養殖生産体制

本プロジェクトは行政、流通や観光、さらに地域住民など多様な関係者から理解を得て、協働したことで実現した。岩地区の「将来自分たちのあるべき姿」「取り組むべき課題」を検討し定めた「浜の活力再生プラン」では、イワガキ販売のための各種施設整備の実施や、出荷・販路拡大などを担う地域商社の立ち上げが、今後の漁業収入向上につながる具体的な取り組みとして位置付けられている。試験開始当初よりイワガキ稚貝の購入に当たっては、浜の活力再生交付金や地方創生事業を活用している。

真鶴町が平成 31 年 3 月に作成、公開した「真鶴町グランドデザイン」にも、

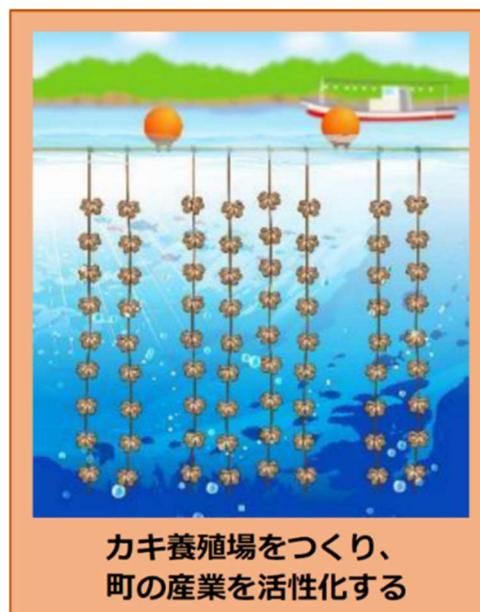


図 6 真鶴町グランドデザインより抜粋

イワガキ養殖の推進が盛り込まれ、平成 29 年には島根県の海士町と包括的広域連携協定を結び養殖指導を受けるなど、町を挙げてイワガキ養殖事業への支援が行われてきた。協議会が発足した平成 30 年は本格出荷に向けて稚貝 12 万個を垂下し、集出荷施設の基本設計を完了させた。令和元年は滅菌海水対応型集出荷施設の建設着工と、本格出荷に向けた販売体制の構築を行った。令和 2 年には本格出荷に向け、協議会から地域商社へ法人移譲した。イワガキ養殖試験は当初県漁業調整規則に基づく漁具敷設許可を受けて実施していたが、販売流通計画や衛生管理体制も具体化され、周囲の支援体制が整ったことから、県に強く働きかけ、令和 2 年 6 月に県知事より区画漁業権の期中免許を受けるに至った。また、貝毒検査や貝毒原因プランクトンのモニタリングは県水産技術センターの協力の下で行われている。

### (3) 地元に新たな名産品としての魅力を知ってもらう

協議会発足から 3 年目、試験開始から 6 年目の令和 3 年 3 月に出荷・販路拡大などを担う地域商社「株式会社岩ガキ BASE」を設立し、5 月に初出荷を果たした。初年度は 1 万個の出荷を記録した。

初出荷に当たりイワガキのネーミングを公募したところ、全国から 465 件もの応募があり、協議会メンバーの漁業関係者で投票を行い、「真鶴の宝」になるようにと考案された「鶴宝（かくほう）」に決定した。本格出荷に先立っては「町民試食会」を開催し、多くの方にご好評いただいた。地元の有聲な特産品として期待する声や、町外の知人にも紹介したいという声が聞かれ、地域の方々に「鶴宝」の魅力を知っていただくことができた。



図7 「鶴宝」のぼり旗

また、初年度は町内の事業者を中心に出荷を行い、真鶴町内で「鶴宝」を取り扱う飲食店や鮮魚店には「のぼり旗」を立ててもらうことで、「鶴宝」の認知度を高めるように努めた。現在も出荷時期になると町内の至る所で「のぼり旗」が見ることができる。真鶴町岩のイワガキ「鶴宝」ブランドが町に定着するよう、地域の事業者の方々とも一緒に取り組んでいる。



図8 「鶴宝」プロモーション

#### (4) 町外からも人を呼び込む

本事業の最終目標である地域活性化には、町外から人を呼び込むことが必須であるが、そのための広報活動として、JR東日本（真鶴駅）や横浜銀行、神奈川県川崎競馬組合など多くの企業にもご協力いただいた。JR東日本ではポスターとパンフレットを作成していただき、真鶴駅構内の改札口からコンコース、パンフレットラックまで「鶴宝」で埋め尽くすほど、PRしていただいた。また、県内の主要な36駅で、ポスターの掲示とパンフレットの配架による宣伝もしていただいた。

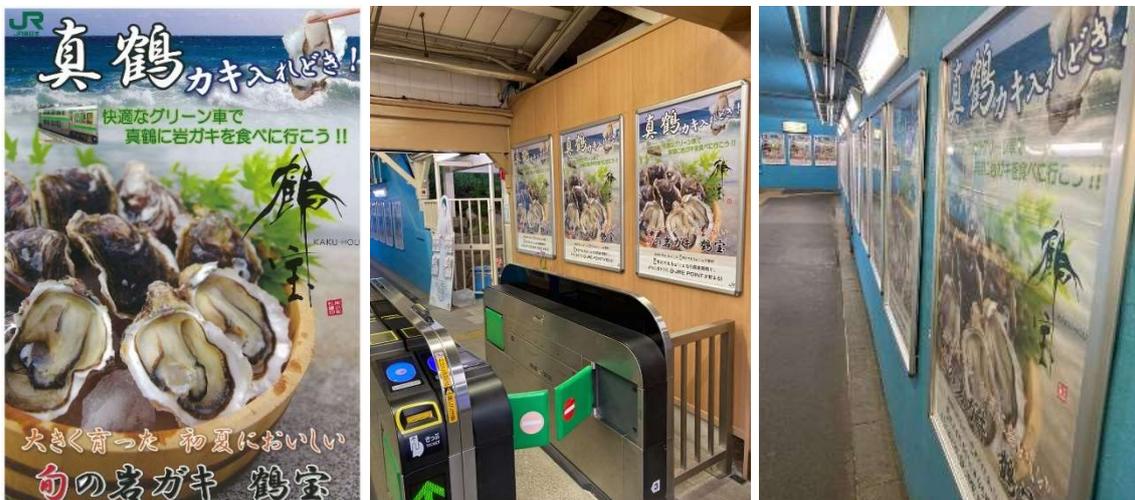


図9 JR 真鶴駅に掲示された「鶴宝」ポスター

横浜銀行では約1,500台あるATMを活用した地域プロモーションとして、約1カ月間「鶴宝」を取り上げていただいた。川崎競馬では「岩ガキ『鶴宝』を真鶴町に食べに行こう記念」レースが開催され、YouTubeやtwitterで拡散されることで、広く宣伝につながった。



図 10 横浜銀行 ATM プロモーション



図 11 川崎競馬プロモーション

JR真鶴駅とコラボし、無料試食会を開催した民間マルシェ「真鶴なぶら市」では、これら宣伝により、町外からも多くの方に来ていただくことができた。民間企業を巻き込み真鶴町への観光を促す広告を多方面に展開することで、漁業振興だけでなく、これまで町の課題であった地域活性化に大いに貢献することができている。「鶴宝」を取り扱う店舗数も令和4年度は町内に17店舗、町外に15店舗と増加傾向にあり、初年度は1万個であった出荷数も、2年目は1万7,000個と増加している。さらに、令和4年度からは真鶴町のふるさと納税の返礼品にも登録され、町の新たな名産品としての知名度も向上してきた。



図 12 無料試食会の様子  
(一般社団法人)真鶴町観光協会より



図 13 ふるさと納税サイトの「鶴宝」  
さとふる HP より

## 6. 波及効果

こうした取り組みの成果もあり、最近では他地域からの漁業者の視察も増えている。出荷3年目を迎えるところであるが、多様な関係者と協働で取り組み多方面に展開したことで、地元だけでなく、県内他地域の漁業者からも注目が集まっている。外洋での二枚貝養殖は、神奈川県では真鶴町のイワガキが唯一であり、私たちの活動から得られた

知見が活用されることは大変うれしいことである。また、「鶴宝」を通じて強化された地域関係者とのつながりを今後さまざまところで生かしていきたい。

#### **7. 今後の課題や計画と問題点**

今後は生産個数の増加と安定化により、これまで以上に町内外から認知される真鶴岩の名産品になることを目指したい。また、地元の産業と連携を強化し、町に人を呼び込む取り組みの推進に一層尽力したい。将来的には「真鶴に来れば『鶴宝』が食べられる！」と町内外から認められる名産品にすることが目標である。